

徹底検証

# SQL Server Management Studio Express

## はどこまで使えるか

無償の  
SQL Server マネージャーを  
使ってみる

初音 玲

HATSUNE, Akira

特集

### はじめに

Visual BasicやC#などのExpress Editionをインストールすると、自動的にSQL Server 2005 Express Editionもインストールされる。ローカル接続だけとはいえ、無料でRDBMSプログラミングを体験できることの意義は大きい。

しかも、プログラミング環境の基本性能は、有償版のVisual Studio 2005と遜色はない。たしかに「設計ツール」

や「テストツール」、コードレビュー用の各種ツールなどは付属していないものの、コードの記述やステップ実行による確認、ビルドしてアセンブリの作成に関する部分に相違はない。

ただひとつ残念な点は、IDEのサーバーエクスプローラから、SQL Server 2005 Express Editionに対してテーブルの作成やデータの投入などは十分操作できるのだが、データベースの管理に相当する操作は一切できないことだ。そのため、たとえば、SQL Serverへの接続時の認証方式をデフォルトのWindows認証から混合モードに切り替えて、ユーザーIDとパスワードを指定するようなアプリケーションのテストを行なうこともできない。もちろん、コマンドラインで使用できるosqlは提供されているが、SQL ServerなのにGUIではない環境を使う気にはなれない。また、GUI前提の情報も多く、osqlでや

ろうと思ってもやり方すらわからない場合も多すぎる。

このようなIDEからでは不可能な操作を補完してくれるのが、SQL Server Management Studio Express（以下SSMSE）だ。このツールは、有償版のSQL Server 2005に付属しているSQL Server Management Studioの無償提供版で、いくつかの機能限定はあるが、基本的には同じ操作でSQL Serverを管理することができる。

本稿ではこのSSMSEを実際に使用した上で、その使い勝手や不満点などを、紹介してゆくことにする。

### 入手と導入

#### セットアップ

SSMSEを入手するには、マイクロソフト社のホームページから、「SSMSE」をキーワードに検索するのが一番手っ取りばやい。ファイル容量は約40MBだ。

ダウンロードしたMSIファイルをダブルクリックして起動すると、インストーラ画面が表示されてディスクの使用量などが表示されるが、残念ながらインストールするドライブやフォルダは表示のみで、変更はできない（図1）。

インストール前にディスク使用量を表示して、インストール後の空き容量を把握できるのは親切かもしれないが、その結果を見て「Cドライブは空きを確保したいから、Dドライブにいれたい」と思ってもどうにもならない。好みの問題もあると思うが、ここまでやるのだったら、インストール先のドライブ選択もできるようにしたほうがよかったのではなかろうか。

#### レベル >>> Level

1

2

3

4

5

#### ツール >>> Tool

- SQL Server Management Studio Express
- SQL Server Management Studio

図1：SSMSEのセットアップ



図3：ネットワーク越しの接続も大丈夫

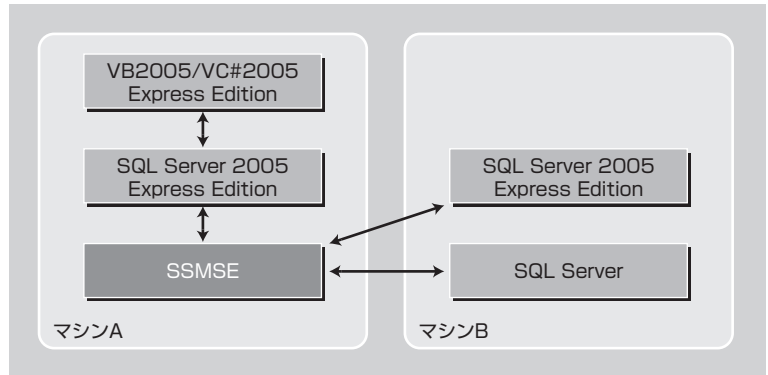
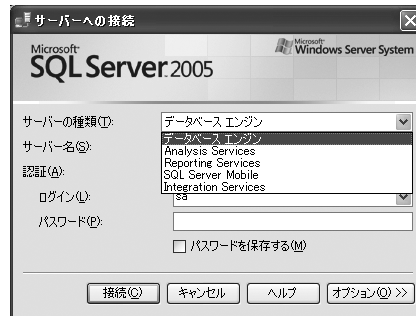


図2：「サーバーへの接続」画面の相違



SSMSE



SQL Server Management Studio

## サーバーへの接続と種類

インストール後、SSMSEを起動するとサーバーへの接続画面が表示される。

図2に示すように、SSMSEは、無償提供のトレードオフとしてSQL Serverの管理に特化している。そのため、サーバーの種類には、データベースエンジンのみ表示される。非SSMSEである通常のSQL Server Management Studioでは、データベースエンジンに限らず、選択が可能だ。

## サーバー名

サーバー名には、SQL Server 2005 Express Edition以外のSQL Serverも指定できる。VBやC#といった開発向けExpress EditionのIDEでは、意図的にリモート接続を制限しているが、SSMSEは同じPC上のローカル接続だけでなく、別PCとのネットワーク接続

(リモート接続)にも対応している(図3)。また、SSMSEに「2005」のようなバージョン名が入っていないことからわかるように、接続先のSQL ServerのバージョンもSQL Server 2005に限定されない。すべてのSQL Serverのバージョンで確認はしてないが、SQL Server 2005 Developer EditionとSQL Server 2000 Developer Editionに対して使用できることは確認できた。



SQL Serverへの接続時の認証は、「SQL Server認証」も「Windows認証」も選択できる。どちらで接続できるかは、接続先のSQL Serverのセキュリティ設定に左右される。

## ユーザー名 (ログイン) の指定

### Windows認証

この場合、ユーザー名とパスワードは、Windowsにログインしているものを使うために、接続時に指定はできない。

### SQL Server認証

この場合、ログイン名とパスワードを指定して接続する。

ユーザー名を入力するフィールドのタイトルは「ユーザー名」となっているが、ログイン名を入力するフィールドのタイトルは「ログイン」となっていて、「名」が抜けている。英語版のヘルプ<sup>[注1]</sup>で確認したところ、英語表記でも「User Name」と「Login」という表現であった。そうすると、日本語訳は正しいということだ。元から間違えているのか、それとも私の感覚がおかしいのか。SQL Server 2000のSQL Server Enterprise Managerだと「ログイン名」となっていたが、なぜ変わったのだろうか。なんとも悩ましい表記の違いだ。

注1) [http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms189721\(d=ide\).aspx](http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms189721(d=ide).aspx)